

長谷観音台座石伝承の展開

横 田 隆 志

一 石という問題領域

石に関わる信仰や伝承は多彩である。早くから民俗学の分野では石の問題に着目し、柳田国男『石神問答』（『定本柳田国男集』第十二巻）、折口信夫「石に出で入るもの」（『折口信夫全集』第十五巻）といった重要な研究成果が世に問われてきた。この他、野本寛一『石の民俗』（雄山閣出版、昭50）、大護八郎『石神信仰』（木耳社、昭52）、五来重『石の宗教』（角川書店、昭63）、最近では吉川宗明『岩石を信仰していた日本人』（遊タイム出版、平23）などが公にされている。特に大護氏の『石神信仰』は総計一千頁を超える大著であって、膨大な数の事例を掲げるとともに、石に関わる信仰や伝承がいかに多彩であったかを教えてくれる。

ただ右に挙げた民俗学の先行研究を繕いても、また説話研究の分野においても、本稿で取り上げる長谷観音の台座石伝承を主たる対象とした研究はほとんど管見に入らない⁽¹⁾。一方、筆者は中世長谷寺の説話伝承を研究してきたが、長谷観音伝承を考える上で石は避けて通れない大きな研究対象である。周知のとおり、長谷観音は方八尺と伝える巨石の上に立つ。しかるに最古の長谷寺縁起を伝える『三宝絵』下巻第20話（九八四年成立）では、

神亀四年ニツクリ終ヘタテマツレリ。タカサニ丈六尺ナリ。徳道ガユメニ神アリテ北ノミネヲサシテイハク「カシコノ土ノシタニ大ナルイハホアリ。アラハシテ此観音ヲ立タテマツレ」トイフトミル。サメテ後ニ堀レバ有リ。弘サ長サヒトシク八尺ナリ。面平カナル事タナ心ノゴトシ。ソレニ立タテマツレリ。徳道々明等

が天平五年ニシルセル観音ノ縁起并ニ雜記等ニ見ヘタリ。

とあつて、早くも方八尺の巨石が長谷寺縁起の主要な要素になっていたことが知られる。また十三世紀後半に長谷観音の靈驗譚を集成した『長谷寺驗記』（以下『驗記²』）の序文は、寺の始原が神代にさかのぼることを示す、次の説話から語り起こされる。

天照太神寶石ノ瑞光ヲ御覽ジテ、手力雄ノ神ニ勅シテノ玉ハク「此ノ山ハ我が本有相応ノ地、汝ガ降化有縁ノ砌ナリ。仍此瑞有リ。汝自今以後、永ク此所ニ居ヲトメテ後代ニ上人來テ我山ヲ崇メムト共ニ此山ヲ治シテ君臣ヲ守リ国土ヲ治セヨ」ト云。

天照大神が諸神を率いて初瀬の地を訪れたとき「寶石」から光が放たれた。その光によつて天照大神は当地が「我が本有相応ノ地、汝ガ降化有縁ノ砌ナリ」であることをさとり、手力雄神に鎮座するよう命じる。手力雄神はこの地で「上人」の來山を待ち続け、徳道上人と邂逅した。徳道は初瀬が靈地であることを知り、ここに長谷寺を創建したという。

このように中世長谷寺の説話伝承の世界では、「寶石」

すなわち長谷観音の台座石の放光がすべての始まりだったことになる。言い換えれば、寺の始原にも関わる信仰対象として「寶石」は確かに認識されていた。長谷寺の観音伝承を考える上で、石の問題は避けて通れないと述べたのはこのためである。

以上の前提をふまえ本稿では、『三宝絵』の伝えるような台座石伝承がその後どのように展開したかを概観する。『概観』とここで述べたのは、関連資料や論点が多様であり、一篇の論考ですべての問題は網羅できないからである。以下の考察は、長谷信仰における石の問題を考えていく上での基礎的作業という側面をもつ点、諒とされたい。

二 長谷観音の台座石伝承

——『縁起文』『密奏記』を中心に

長谷寺創建の経緯については『三宝絵』や『今昔物語集』等、平安期成立の諸文献にも記されるが、従来の縁起を大がかりに再編した文献に『長谷寺縁起文』（以下『縁起文』）がある。本書は長谷寺と諸神との関わりについて記した『長谷寺密奏記』（以下『密奏記』）と一具をなすと⁽³⁾言われる。両書はともに作者を菅原道真に仮託した文献で

あるが、『長谷寺驗記』上巻第7話に「同（寛平）八年二月十日、天神并ニ当寺ノ俗別当三綱等縁起・秘記ノ二巻ヲ以公家ニ奏ス」とその存在が示唆されるほか、両書の記述をふまえた文言が『驗記』に散見することから、遅くとも『驗記』が編纂された十三世紀後半以前には成立していたものと思われる。⁽⁴⁾

では『縁起文』『密奏記』において、長谷観音の台座石はどう記されるか。はじめに『縁起文』の所説を確認する。なお『驗記』の叙述は両書の影響を受けているので、関連箇所については適宜、その本文を紹介することとする。

近江国から漂流してきた巨大な霊木で十一面観音像を造立したものの、それを安置すべき場所について徳道は思い嘆いていた。そこで徳道が本尊に祈りをささげたところ、夢に「金神」が現れた。

其夜夢有ニ一金神^シ指^{シテ}示^ス北峯^ヲ曰^ク、聖人莫^{カレウレハ}二患^モ慮^フ。
檢^{カシガフルニ}ニ峯地中^ノ有^リニ金剛宝磐石^ニ。上^ハ地際^{ニヒトシ}齊^ニ、下^ハ輪際^ヲ窮^メ、其体在^ニ三枝^ノ。々頂^{ノイタギニ}大悲菩薩坐^{シテ}說法^ス。此其^レ一也。用^テ彼^ヲ可^ク為^ス金剛宝^ニ。子座^ト。元来未^{モトヨリ}宜^ダ顯^{シク}機縁^ニ已^ニ。

成^{ナレリ}矣^ニ。吾等神王部類^ニ八族^{アリ}。其名^ヲ曰^フ龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・伽樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・天神王等^ト也。

徳道の夢に現れた「金神」の正体は龍神等の「神王」だった。「金神」は初瀬の峯に「上^ハ地際^{ニヒトシ}齊^ニ、下^ハ輪際^ヲ窮^メ、其体在^ニ三枝^ノ」、すなわち金輪際から生じ三つに枝分かれした「金剛宝磐石」があることを教える。引用箇所が続けて「金神」は「神王」についてさらに詳しく説明し、八類の「龍神」や十二類の「天神王」が初瀬の「金剛宝磐石」を守護してきたことを告げる。徳道が夢から覚めて後、山は嵐に包まれた。

天平元年己巳歳八月十五日、及^テ其夜半^ニ天風吹^キ峯^ヲ、龍王撃^シ、大雨時降^{ニククテ}、成^ス山崩^{クツレ}石破^{ワレ}之音^ヲ。心肝不^{ズシテ}安^{カニリ}、纔^{ヒマ}自^{ミルイサツ}窓間^ヲ見^フ電^{ノヒカリヲ}輝^テ天龍八部并^ニ八大童子等、摧^{クツキハ}巖^{ホツ}堀^{ナル}地^ヲ。不^レ幾^バ夜曉^{アラガサ}。現^レ見^ニ北峯^ヲ平^{ナルコト}如^レ掌^ニ。厥岫嶮^ノ中有^ニ金剛宝磐石^ニ。縦広正等^ニ方八尺也。其面又如^ニ掌^ノ。有^リ綾文并^ニ菩薩行足^ノ穴^ニ。新像御足比校^{スルニ}敢無^レ違^フ。聖人悦^テ曰^ク、輪王欲^{シテ}出^ハ世^ニ、瑞獸^ニ地馳^{ワシリ}、雷震^{シテ}欲^ニ大^ニ命^ニ電光^ニ天^ニ輝^ニ。靈場宝^ニ石欲^{シテ}顯^レ瑞

木来^ル於^ニ此山^ニ。龍尾出^レ寸知^ニ其大小^ヲ。靈瑞既奇特也。兼知^テ此山秀^ノ甲^{ナルコトヲ}。余山^ニ。

真夜中、龍王は雷を落とした。大雨が降り、山が崩れ、石が破れた。稲妻の光を見てみると、「天龍八部并八大童子等」が巖を砕き、地を掘っている。夜が明けると、方八尺の「金剛宝磐石」が現れていた。石の表面には「綾文」や「菩薩行足穴」があり、その穴に新造した観音像と合わせみると、足のかたがびたりと一致した。「靈場宝石欲^レ顯^{ント}」とあるとおり「宝石」は自らの意志で顯現したものとされた。

長谷寺の堂舎が完成し、行基上人を導師として供養が行われた夜、徳道の夢に、今度は八人の童子が現れた。

白衣金剛童子八人、幽然^{トシテ}出現^ス。語^テ聖人^ニ曰^ク、我等八輩者宝磐石守護密跡神也。其名云^ニ一岱^ヲ・石精^ヲ・護石・青頸^{キョウ}・施願^{シガン}・隨念^{ズイネン}・密跡^{ミセツ}・施無畏童子等^ニ也。

童子は「宝磐石守護密跡神」であると名乗った。初瀬の「宝石」はこの童子によっても守護されていたのである。

ところで「金神」の夢告では台座石に三つの枝があるとされただけで、それ以上の具体的な記述はなかった。三枝の内実を明らかにするのは、行基の説話においてである。

長谷寺開眼供養の導師をつとめた行基は、当地のさまざまな奇瑞に接し、本寺に戻ることなくそのまま百日間参籠することにした。すると七十六日目に「当山守護八大童子最末金剛使者童子」が現れ、長谷山内の聖地を詳しく説き示すとともに、「宝石」について次のように述べた。

其中所^ノ顯^ル之金剛宝石有三枝^ニ。上^ニ地際分^ニ、下^ニ金輪束^ニ。一枝指^シ西土^ニ。中梵仏成覚宝石也。一枝在^リ清山^ニ。補陀落山観音所座石也。一枝在此山^ニ。因^{リテ}於靈木^ニ金神示顯也。副^{ソツテ}其宝石^ニ而左脇有^リ龍穴^ニ通^ス無熱池^ニ。八大龍王并小龍等守^レ番^ニ而^テ来^リ在^ニ大聖左^ニ。近^ニ護^ニ宝座山内^ニ遠^{クハス}治^ニ王法国土^ニ。又天龍八部衆、各上^ニ首^ニ八輩^ヲ無量眷属^ヲ圍^{カコシテ}宝座^ニ而守護^ス。亦八大童子、侍^ニ從^ニ観音之右^ニ而為^ル菩薩応化使者^ト。又相^ニ去^リ宝座^ヲ於東西^ニ各三百余歩^ニ有^リ二^ニ仙宮^ニ。数輩仙人、恒時読^ニ誦^ニ大乘經^ヲ廻向諸衆生^ニ。

童子は金輪際から生じた「三枝」の石について、一つは「中梵仏成覚宝石」、一つは「清山」（補陀落山）の「観音所座石」、残る一つが「此山」（長谷山）の石だと告げた。なお『験記』序文では右の叙述をふまえ、

其宝石ヲ云ヘバ天龍八部ノ顯ハス所、本ハ金輪際ニシテ三ノ枝地際ニ有リ。中天竺ニサシテハ諸仏成道ノ御座トナリ、補陀落山ニ至テハ觀音利生ノ宝石トナリ、此靈山ニ有テハ普門示現ノ兩足ヲ顯ス。

とある。

『緣起文』に話を戻せば、「寶石」の出現は「因^{ヨリテ}於靈木^ニ、つまり長谷觀音の御衣木の存在がきっかけになったのだという。『寶石』の左脇には龍穴があり、無熱池に通じている。その石は「天龍八部衆」をはじめとする無量の眷屬に取り巻かれている。八大童子は觀音の右につきそい「菩薩応化使者」となっている。また「宝座」の東西にある二つの仙宮では仙人が大乗經を読み衆生に廻向している。

『緣起文』の記すところは右にとどまらない。

東北隅仙宮隣次^ニ有^リ「平然地」。日域大小諸神守^ニ護^{スル}宝石^一之所。後^{ホリ}山堀^{ウガチテ}入地中^ニ有^リ二十六丈水精宝塔^一。以^テ三七宝^ヲ莊嚴。其空輪^{ホリ}則^ハ齊^{サイス}山頂^ニ。是過去千仏現在七仏遺身舍利納^メ此中^ニ。未來諸仏^{ヒトシ}〈行仁上人記曰、奏書心也〉舍利又可^セレ納^{ベシム}此中^ニ。是閻浮提福田也。中^ニ於^テ

此宝塔并宝石^ニ（此宝塔并宝石於^テ中尊^ニ）四方角^ニ在^リ。四天王^ニ衛^ス護^ス之^一。

「宝座」の東北には「平然地」がある。そこは「日域大小諸神」が「寶石」を守護するところである。また「後山」には「十六丈水精宝塔」がある。塔の最上部（空輪）は、高さが山の頂に等しい。これは「過去千仏現在七仏」を納める舍利塔である。そしてこの舍利塔や「寶石」を中尊として、四方は四天王によって守られている。

東山腰隔^{シテ}河^ヲ有^リ「鵝形石」。天照大神影向^{シテ}而坐^ス彼石^上。其石南有^リ「沓形石」。□春日大明神影向^{シテ}石也。此等神石北谷^ニ、又有^リ「□仙宮」。凡^{ソノ}不動^ハ伏^{シテ}魔^ヲ而立^ツ灑^ニ下^ニ。天人奉^メ仏^ニ而居^ス山上^ニ。一山内無^シ非^ニ所^一。聖衆修行地^一。此山則秘密莊嚴之土、群仙窟宅之地也。一瞻^ニ一礼者^一永離^ニ三惡趣^一速滿^ニ二利願^一云々。

さらに東山（与喜山）の「鵝形石」には天照大神、その南の「沓形石」には春日大明神が影向する。その北谷には仙宮がある。滝の下には不動明王が、山上には天人がおいでになる。一山の内で聖衆修行の地でないところはない。この山を拝むものは長く三惡趣を離れ、すみやかに自利と利他の願いを満たすことができる。

こう告げた童子は行基を連れて山内を巡礼した。⁽⁸⁾この山の秘密莊嚴された様子は肉眼の及ぶところではない。そこで行基は、童子の勧めで三昧に入り、「山内皆密嚴地^{ニシテ}而両部^{スルヲ}諸尊弥綸^{スルヲ}」を拝見した。童子は本尊のもとに戻り、忽然と姿を消した。なお「童子向顔^{コトノハ}之言^{コトハ}、聖人巡礼之儀」については別に七巻の書物があるという。

以上、長谷観音の台座石に関わる『縁起文』の叙述の概要を示した。『縁起文』は長谷観音の台座石を「宝石」「金剛宝磐石」「宝座」等の呼称で表記する。そして行基の長谷寺巡礼の記述では、「宝石」の脇にあり無熱池に通じる龍穴、「宝石」を取り囲む天龍八部や八大童子、「宝石」の左右にある仙宮、日本の神祇が「宝石」を守護する「平然^{ナラ}地」、「宝石」の後山の地中であつて諸仏の舍利を納めた「水精^{スズク}宝塔」、その塔や「宝石」を守護する四天王、さらには神々の影向する「鵝形石」「沓形石^{ツツノ}」など多くの聖跡が登場し、これらを順に描いていけば初瀬という聖地の姿がうかがいがつてくるような観を呈している。本文に「一山内無^シ非^ト所^ト聖衆修行地^{セントシテ}」とあるとおり、山内のあらゆる場所は聖衆の集まる聖跡として認識された。その数多くの聖跡の中心に「宝石」は位置しているのである。

なお「宝石」は初瀬という信仰空間の中心を占めたばかりではない。『験記』ではしばしば、

・我ガ御代ニ此宝石ノ顕ハレ玉事ヲ悦御ス。(上2)

・第一舒明天皇ノ御宇ニ、当寺ノ宝石モ観音モ未^デレ顕^レ給^ニ前一百年計ニ、

(下1)

といった叙述が見受けられる。本稿冒頭でふれたとおり、説話伝承の語る長谷寺の歴史は「宝石」の出現をもって始まる。「宝石」という存在は、長谷寺史の画期をなす意味においてもとりわけ重要な位置を与えられているのである。

また『三宝絵』などと比べると『縁起文』が大がかりで手の込んだ叙述になっていることはただちに了解されるどころだが、「宝石」出現の記述の末尾で「兼知^テ此山秀^ノ」^{ナルコトヲ}甲余山^ニとある点はやはり注意される。言うまでもないが、初瀬が他に拔き出た聖地であることをいかに説き示すが『縁起文』のテーマなのである。

では一方の『密奏記』はどうか。『密奏記』では宝石出現に関する叙述は見られない。そのかわり、徳道がいまだ地中にある「金剛宝座」から発せられた光を見て、初瀬の

地で修行する話から始まる。

長谷寺司等謹勸言上

右依勅命^ニ天蜜仁抽旧記簡要^ヲ曰久、本願德道聖人^ハ訓宿
因天入此山里居西岳天遥^ル見廻山内^ヲ須留、文武天皇即位
九年乙巳五月八日申尅^ル、今所顕之金剛宝座、在此峯
地中天見放光留。則尋行光下勤行精進^ル須留、其傍^ニ有一
人帽冠^ハ翁天告聖人天曰久、我者是礼手力雄明神也。
天照大神尊開天岩戸天、物始^ル祝事^志、我礼始自手力
雄明神天引率諸神達^ヲ入此靈山留。則常^志住此山躬崇
此山^ヲ、密嚴本有乃光乎和計、密嚴本有乃地乎秘^志、道安
連^{マツリノミコト}愚奈留人於祝。五人神樂雄・八人舞童姬、国久加
礼、君貴加礼卜祝比集^{マツリノミコト}天野下仁^ニ扱此地^ヲ天始我國朝
政武。其時毛有此光幾。今此光仁無有異^志。爰^ハ尔天
照大神尊深入震襟^志、命于我天曰久、此山者我加本有相
応之地也。汝質降化有縁之砌也。仍有此瑞梨。汝自今
以後礼久居此山天後代^ル聖人來天崇此山^ヲ登共^ニ尔治此山^ヲ天
退邪神計、祭義神^ヲ天守君臣里治国土^ニ云々。則我礼手力雄
明神、忝久奉神勅^ヲ長住此山^ニ天有所待期里。然尔思惟聖
人前身^ヲ須留、元登役優婆塞^天登志修業^ニ此一代峯之時、南
頭於豊山峯^ニ天扱勝地天、発精舎建立之願^ヲ須。行者兼天

不果^志天没^{世武古}乎知天終仁為訓其願^ヲ仁入法界体性三昧天分
身志天聖人來于此山^ニ留。如此語^{登古}良久^{天志}、翁手力雄明神
忽^{コトバ}尔与言共^ニ尔没于虚空^ニ須留。

徳道はこの地で一人の「帽冠翁」すなわち手力雄神と
邂逅した。手力雄神は天照大神が諸神を率いてこの地を訪
れたときも同じ放光があつたことを告げる。この説話が前
節で示した『験記』序文の原拠であることは明らかだが、
『密奏記』の叙述はもう少し手が込んでいるようである。
鍵は「金剛宝座」の二度の放光にある。すなわち初度の放
光は、初瀬の地を天照大神が見出し、手力雄神に守護の勅
命を与えるきっかけとなつた。次いで二度目の放光は、徳
道が初瀬の地を訪れ手力雄神と邂逅するきっかけとなつ
た。つまり天照大神・手力雄神・徳道を結びつけかけはす
べて「金剛宝座」の放光だつたわけである。しかも『密奏
記』では、この後、徳道が伊勢に参籠して神の「御本地」
であるところの十一面観音立像の姿を感得し、長谷観音を
造立したという展開をたどる。長谷寺の開基に至る一連の
できごとは、あたかも「金剛宝座」の意志に導かれている
かのごときである。

なお『密奏記』の裏書では、

天照大神御父

ヒナノシ

陽神〈伊弉諾ノ尊也。東山腰石坐御南〉

天照大神母

カゲルノシ

陰神〈伊弉冉ノ尊也。東山腰石ニ座御ス北〉

天照大神弟日

ヒカルカミ

光神〈月弓尊也。東山ノ北ノ谷ノ石ニ坐シ御ス上〉

天照大神弟住

アメノシ

雨神〈同谷ノ石ニ坐御之下〉

等とあつて、神々と石との関係が示されている。池上洵一氏も述べるように「一帯は石のパンテオンともいうべき様相」を見せている。¹⁾

以上『縁起文』『密奏記』等における石の叙述をまとめた。中世長谷寺の説話伝承において観音の台座石がいかに大きな存在であつたかは、もはや贅言を要さないであろう。

三 台座石伝承の展開

前節では『縁起文』や『密奏記』等の描く「宝石」伝承の様相をまとめた。長谷観音の台座石自体について見れば、その伝承は、金輪際から生じていること、及び三つに

枝分かれしていることという二要素で構成されている。

ところで長谷観音の台座石伝承は中世から近世にかけて書かれた文献でもよく取り上げられてきた。本節ではその展開のありようをまとめる。なお『三宝絵』と同様に徳道が夢告を得て地を掘つてみると磐石が現れたと記す文献に『扶桑略記』神龜四年二月辛酉日条、『今昔物語集』巻第十二第31話、『東大寺要録』六・末寺章九、『古事談』巻五第27話、『元亨釈書』巻二十八（ただし『扶桑略記』と『元亨釈書』では雷が石を砕いたという説を併記²⁾）等があるが、冒頭で述べたとおり、本稿は『三宝絵』のような伝承が後にどう展開したか概観することに主眼をおく。そこで右に列挙した文献の考察は割愛し、以下では金輪際や三枝説等、『三宝絵』以後の要素を含む用例を取り上げていくこととする。

成立年代が確定できる意味で言えば、この説話の初見資料は、建久二年（一一九一）の南都巡礼の記録『建久御巡礼記』である。はじめに見通しを示せば、『建久御巡礼記』の所説は『縁起文』より先に成立したと思われる。

(一)『建久御巡礼記』

此觀音ヲ立參タテマカサセタル石事ハ、徳道二丈六尺ノ像ヲ造ツクリ畢ハ之後、此峯嶮サカシタシテ、堂ヲ構カマ、難ガク叶カハ奉立ムツムニテ尊像難マシ叶思シト煩ワザ之間、夢内靈神忽現、此北峯地ノ中磐石有リ、モトヨリコノカタ、イマダ不顯ズレバ、宜可ヨク顯ハレ、時雷鳴ニイカヅナリ、水流ミツナガル、洗アラヒテ後見、縦広正等方八尺石、其面如シ掌テ、徳道弥忝カガシメナクシメント是思シヒテ、此磐石之上奉立ニツル。

古老口伝云、南閭浮提大地底有二大磐石一、枝分ワケナリ三、一摩伽陀国中心、金剛座之石也。三世諸仏必着ツイテ此石座ニ、成覚オホサト給。指サシ南方ミナミ一ハ枝、南海中補陀落山也。一ハ枝此長谷寺觀音之所座也。自ヨリ二本モト菩薩ノ行アルイタマヘル足跡ミツシノイ如ニ闍ニル有之ルカガリ。徳道奉造此尊像御足、齊叶ヒシトガヒテ無違事シトガフコト申伝タリ。

右の所説でまず注意されるのは、三枝説には言及するが、金輪際から生じたという要素が見えず、大地の底に「大磐石」があるとのみ記す点である。これと同様に金輪際という要素を欠き、三枝説にのみ言及する事例は、十二世紀末頃から十四世紀かけて成立した諸書に散見する。

(二)『諸寺建立次第』(一一九五―一二一六年の間に成立

か)

而堂舍構ナカレオモフコトヲバ何為ムト思間、夢中ニ現金神、指此峯サシ、聖人莫慮、檢峯地中有磐石、其形殊有三枝、々頂每大ミナト悲菩薩坐マフ、此其随一也、以之為彼御座、吾ハ彼石守護神也。徳道夢覺後、大風吹峯、大雨時降ル。山崩レ石破、不幾時夜曉。見山峯地平コト如掌。其嶮中有宝盤石。方八尺也。有綾文。又有菩薩御足穴。徳道所造新造御足比校スルニ无違。

(三)護国寺本『諸寺縁起集』(一二三五年以降成立)

或□(本カ)云、古老伝云、南閭浮提大地之底二大盤石アリ。枝ヲ三方ヘ分テリ。一ハ摩伽陀国中心ノ金剛座ノ石也。三世諸仏等付此座、覚成□□(成給)フ。次南方エ指セル一ハ枝ハ南海ノ嶋補陀落山ノ觀音座給石□□方ヘ指セル一ハ枝ハ、此長谷寺觀音ノ所座ノ石也。□□(本カ)ヨリ菩薩□□(之行)足ノ跡、エレルガ如シ。今ノ徳道聖人之所造之ニ丈六□□御足ヒシ□□(トカ)アヒテ聊モタガフコトナシ云々。

(四)『阿婆縛抄』卷二百「諸寺略記上」(一二七九年成立か)

本尊出来之後、亦堂舎構高下險難也。恒亦歎。夢中金神現指示北峯、聖人莫患峯地中有盤石、其面金容坐、其体在三枝、々頂大悲菩薩坐說法、此其一也、用之可為金剛宝師子座、自昔諸天龍神擁衛此地、替番守護。夢覺了時、大天風吹峯、龍王掣電大雨時降、山崩石破。心肝不安間、不幾夜曉現。見峯上地平如掌。厥岫嶮之中有宝盤石。縱広正等方八尺也。其面如掌。有綾文並菩薩行足跡。德道比校得道新造御足敢無違云々。

(五)『統教訓抄』第十三冊(一二三二年以降、十四世紀前半に成立か)

長谷寺ハ養老四年庚申沙門德道此寺ヲ立。本仏ハ觀音ナリ。仏師文会、立像高二丈六尺、金剛座ニ立給ヘリ。此金剛座ハ南閭浮提ニ三アリ。一ハ中天竺摩阿施国。仏正覺ノ座也。一ハ補坦洛山觀音說法ノ座。一ハ今此座ナリ。

(六)『帝王編年記』神龜四年(七二七)三月二十日条(十四世紀後半に成立か)

德道者播磨^{シノノカミ}国人也。母逝去之後、偏流浪山林、遂止住大和国城上郡長谷山。夢中靈神忽現曰、此峯地底有磐石、本自以来不顯。宜可顯。德道悦不語人。于時雷響水流、見其跡、縱広正等方八丈石。其面如掌。德道悦奉立此石上、^{天然也}「古老伝云、南閭浮提地底有磐石、枝分三方、一者摩伽陀国之中心金剛座也。三世諸仏如来此石上成正覺、指南一枝是南海補陀落山也。指東一枝此觀音座也。本自有菩薩之行定跡如彫。奉立此像、寸法叶無相違」。

『諸寺建立次第』や『阿婆縛抄』では石に「三枝」ありと記すが、枝分かれした三つの頂がどこかは明示しない。また『諸寺建立次第』では「金神」が「吾ハ彼石守護神也」と名乗るのに対し、『阿婆縛抄』では「自昔諸天龍神擁衛此地」とあつて龍神等が「宝石」を守護してきたことが示唆される。これらに対し『統教訓抄』や『帝王編年記』では天竺マガダ国・補陀落山・初瀬という三つの頂を

明示するにとどまり、石の守護者に関する記述はない。

一方の護国寺本『諸寺縁起集』ではそもそも菩薩前障子文、神亀六年（七二九）太政官符、天平五年（七三三）徳道上表文等、複数の長谷寺関連資料を載せている。右に引用した台座石伝承は、神亀六年太政官符と徳道上表文の間に記されるものである。内容としては『帝王編年記』のそれとほぼ重なる。また「或□（本カ）云」とあることから、何らかの先行資料を書き記したことが推測される。表現が完全に一致するわけではないものの、「古老伝」として載せる点を含め、護国寺本『諸寺縁起集』や『帝王編年記』の叙述は『建久御巡礼記』と近いようである。なお護国寺本『諸寺縁起集』で書写された三種の資料のうち、徳道上表文に台座石伝承が見えるが、その所説は『三宝絵』と同様に、「靈神」の夢告に従って徳道が「磬石」を掘りあらわしたというものである。

このように平安末期から鎌倉期を中心とした時期の台座石伝承は、三枝説には言及するが金輪際には言及しないタイプと、『三宝絵』と同様にどちらにも言及しないタイプに大別される。言い換えれば、前節で紹介した『縁起文』や『密奏記』の所説は突出して内容・分量ともに豊富な文

献であり、金輪際伝承や天照大神・手力雄神の登場といった独自要素を多く備えた書物ということになる。¹³とすれば長谷観音の台座石については、まず三枝説が成立し、そこからの派生として金輪際伝承が付け加わったという見通しが導かれる。逆の想定、すなわち『縁起文』のように内容豊富な伝承が先に生まれ、『建久御巡礼記』以下の文献がそれを簡略化したという想定も成り立たないわけではない。しかし作者も成立事情も異にする諸文献が足並みをそろえて『縁起文』の叙述を簡略化したとは考えがたい。

そもそも『三宝絵』のような古い伝承が再編されて『縁起文』のような新しい伝承が形成されたことは、つとに達日出典氏が論じている。最近では藤巻和宏氏も、達説に批判、修正を加えつつ、『三宝絵』のような伝承から『建久御巡礼記』等が記すような再編の段階を経て、『縁起文』の叙述が成立したと指摘する¹⁴。その再編過程については未解明の点がいまだ多く、今後理解を深めていかなければならないが、『縁起文』の伝承を鎌倉期における長谷寺縁起の一種の集大成としてとらえる見方は、台座石伝承を把握する上でも有効であるように思われる。

なお詳細は別稿に譲るが、中天竺のマガダ国には釈迦が

成道した金剛座があり、その石には金輪際から生じたという伝承があった（『大唐西域記』巻八「摩揭陀国上」等）。『建久御巡礼記』のように、三枝の一つがマガダ国の金剛座であるという解釈が先に成立していたのであれば、長谷観音の台座石に金輪際伝承が付随する下地はすでにとのつていたとみるべきであろう。

以上の用例と対照的に、三枝説と金輪際伝承の双方を記した文献としては次のものが挙げられる。

（七）嘉元四年（一二〇六）十月十八日定証起請文（備後浄土寺文書・鎌倉遺文二二七四七号）

又長谷寺縁起曰、当山者諸仏転法之砌、菩薩利生之地也。金剛宝石、上齊地際、下窮金輪。其体有三枝。一枝指西方如来成正觉寂石、一枝在補陀洛山観音所坐宝石、一枝在此山内。因霊木顕現霊像、踏盤石済度。期沙界瞻一礼者、永離三惡趣、速満二利願文。

如此縁起者、於一石有三枝、西方之一枝、即是釈尊正觉金剛座也。三災壊劫之時、不為劫火之所焼、於阿僧祇劫、常在霊鷲山。然者、西方一枝若為常在不變者、東南之二枝共不可壊滅。

（八）『三国伝記』卷二第15話（応永年間後半以降、永享頃までの間に成立か）

彼ノ宝石ト者根ハ金（輪）際ヨリ生テ三ノ枝地ニ出タリ。猶ヲ伊字ノ三点ノ中天竺ニ於テハ諸仏成道ノ御座トナリ、補陀落山ニ至テハ観音利生ノ宝石也。此ノ霊山ニ在テハ普門示現ノ両足ヲ顕ス。

一見して明らかなので詳細な比較は省略するが、定証起請文の前半部は『縁起文』の叙述を抄出したものである。一方『三国伝記』には『長谷寺験記』を出典とする説話が十二話確認されている。¹⁶⁾ 右に引いたのはそのなかの一話である。『験記』に見えない表現として『三国伝記』には「伊字ノ三点」とあるが、池上洵一氏は、悉曇の伊字が三点からなり、その三点と同じように地上三箇所に宝石が現れたことを示すと指摘している。¹⁶⁾ 『験記』の叙述と異なる新たな内容が『三国伝記』に付加されているわけではない。いずれにせよ『縁起文』や『験記』の影響を受けると、長谷観音の台座石に金輪際伝承と三枝説がともに付随する様相がよく見受けられるところである。

定証起請文につき付言すれば、浄土寺は瀬戸内の要港、

尾道に所在する古刹である。西大寺僧定証はその再興に尽力し、嘉元四年（一一三〇六）十月に西大寺長老信空を迎えて大規模な再興供養を催すとともに、この起請文を作成した。起請文によれば、文永十一年（一二七四）「発菩提心」を祈願するため定証は長谷寺の宝前で「三千三百三十三遍」の礼拝を行い、「不思議妙瑞」を感じたという。後に定証は叡尊の教化に導かれて出家し「西大寺経廻二十余箇年」という人生を送った。そして浄土寺を再興するにあたり、聖徳太子御作の伝承を持つ十一面観音像を金堂本尊に迎え、「長谷寺観音座」を模した「宮殿石坐」を造ってその上に安置した。その座には「結縁名帳」も納められたという。

起請文の行間からは、長谷寺での信仰体験が定証の胸のうちに生き続けたさまがよく伝わってくるが、さらに注意をひくのは「三災壊劫之時、不為劫火之所焼、於阿僧祇劫、常在靈鷲山（略）西方一枝若為常在不變者、東南之二枝共不可壊滅」という『縁起文』に見えない叙述である。「三災壊劫」とは世界が壊滅する劫末に起きる火災・風災・水災を指す。定証起請文においては、長谷観音の台座石に、劫末の災害にあつても損なわれることのない常住不變

の聖跡という意味付けが与えられているのである。定証としては、長谷観音の台座石に模した石坐を用いることで常住不變の初瀬の聖跡にあやかり、再興した浄土寺が末長く隆盛することを祈ったに違いない。

さて十四世紀以降になると『縁起文』の影響が顕著に表れる傾向と、それをふまえつつ新たな説が付加される傾向とがともに見受けられるようになる。このうちまず注目されるのは、長谷観音の台座石を瑪瑙石とする説である。

（九）『竹むきが記』下巻（一三四九年成立か）

観音の利生方便は異なる上、この山の靈地、世に勝れて、一度もこの地を踏む者あらば、長く三惡道に墮つべからずなどぞ申侍。御足に踏ませ給なる瑪瑙の石は、天竺国・補陀落山・この山、三界の中に三所にのみありと申伝へたるは、まことにや侍らん。濟度利生の空しからざる事、古に旧り今に流れて初瀬川の音絶えず、大慈大悲の深き色は八入の岡の木々に染めても、猶喩とするに及ばざるにや。

貞和三年（一一三四七）正月、『竹むきが記』の作者日野

名子は長谷寺に参詣した。作者は、本堂に局を設けて観音の御前に詣で、念持仏を本尊として三十三体を造り長谷寺で供養するという宿願を果たした。右に示したのは、こうした長谷寺参詣に関わる一連の記述のうちの一節である。

三枝説とともに、ひとたび初瀬の地を踏む者は長く三悪道に堕ちないことを併記する点は『縁起文』や『験記』の叙述を想起させるが、台座石を瑪瑙とする所説は両書に見えない。一方、長谷寺での念持仏供養といった作善を作者が営むにあたっては、それを差配する御師の長谷寺僧がいたはずである。本文中に「申侍」「申伝へたる」と繰り返されていることをふまえると、右の説も御師から伝え聞いた内容と考えるべきだろうか。⁽¹⁸⁾ ほかならぬ長谷寺において、信者への唱導として「寶石」伝承が喧伝された痕跡として、非常に重要かつ興味深い記述である。

ところで『縁起文』では、後山に「水精宝塔」があるとはするものの、観音の台座がどんな石でできているかは記していないかった。「寶石」瑪瑙説は、『縁起文』に記述のない石の材質を明示する伝承としてひとまず理解できる。

瑪瑙が選ばれた理由はなにか。確定的なことが言える段階にはないが、一つ可能性があるのは修験の影響である。

そもそも『縁起文』は、長谷寺開山の徳道が葛城修験で特に重んじられた法起菩薩の応化であり、かつ役行者の再誕だと記す。また蔵王権現が長谷寺の伽藍を擁護するため金峯山から橋を渡って毎日影向するという記述もある。こうした叙述に端的にうかがえるように、中世長谷寺の説話伝承は修験との縁が深い。⁽¹⁹⁾ その修験の世界観において、石が重要な信仰対象であったことも自明の事柄に属する。しかるに、

・一代峯の極めの事は金峯山縁起に垂れらる。今この峯に仙宮六所あり。これに因り、上宮太子、如法經五部を書写するに、一所に安置し、七重の馬惱の石塔を造りてそれに内め給ふ。(『諸山縁起』所収「一代峯縁起」)

・大和州宇多郡有_二勝地_一。号_二之室生山_一。又名_二精進峯_一。(略)山北角有_二金剛夜叉崛_一。劫末出世_ニ可_レ拔_ニ濟郡(群)生_一。南角有_二方三尺八寸馬瑙_一。備_二賢聖之座_一。(称名寺蔵『六一山階寺寛継法橋』)

・上宮太子四雪ノ駒ニ乗テ、此ノ山ノ禪定ニ到リ玉フニ、皆吠瑠璃瑪瑙靈勝ノ頂也。(『三国伝記』卷十二第30話「富士山事」)

とあるように、山岳寺院にはしばしば瑪瑙に関わる伝承が伝わる。いまだ仮説の域は出ないが、「寶石」瑪瑙説も長谷寺における修験の影響を受けている可能性はみておく必要があるだろう。⁽²⁰⁾

さて『縁起文』以降、確認されるようになる「寶石」瑪瑙説は、十五世紀以降に成立した諸書に散見し、息の長い影響を与えたことが知られる。

(十)『神明鏡』上巻(一四三四年以降、十五世紀中葉に成立か)

神亀四年ニ造修ス。上人夢告有ケレバ長谷山ノ馬瑙ノ石上ニ居奉ル。行基菩薩供養有。

(十一)『明宿集』(一四六五年前後に成立か)

スナワチ、コ、ハ補陀落山トシテ、根輪際ヨリ涌出ノメナウ
瑪瑙ニ生身ノ十一面觀自在尊現ワレ給フ。^{アラタマ}

(十二) 永正二年(一五〇五)二月十九日長谷寺繡帳切縁起(清浄光寺文書)

泊瀬ニテ遊行ヘ女ノマイラセタルヨシヲ右ノ如クシカ

く云ニ、十穀驚テ此不思議ヲ案ルニ、泊瀬ノ御真鉢ハ瑪瑙石也、其瑪瑙石ノ正鉢ハ女体也、シカレバ彼御真鉢ノ十念布施トテ參セ玉タル也トゾ云ケル。⁽²¹⁾

『神明鏡』は歴代天皇の治世中の歴史事象を記録した年代記であり、右の長谷寺縁起は聖武天皇の御代のできごととして紹介されている。長谷観音の台座石に関する記述は簡略で、金輪際伝承も三枝説も見えないものの、その石は瑪瑙だったと記す。

次に『明宿集』では初瀬の地と猿楽との因縁の深きことを説く一節のなかに右の記述が見出される。「コ、ハ補陀落山トシテ」という文言が三枝説をふまえての記述なのか否かは明確にできないが、金輪際から生じたという叙述があることを考慮すれば、『明宿集』の叙述は『縁起文』の影響を受けて成立、展開した伝承の一つとして位置付けてよいものと考えられる。

長谷寺繡帳切縁起では金輪際伝承も三枝説も付随していないが、観音の台座石は「泊瀬ノ御真鉢」であり、その石が瑪瑙でできているとの解釈を示す。永正元年(一五〇四)八月十八日、長谷寺で賦算を行った遊行二十一代知蓮

上人のもとに五十歳ほどの女が現れ、結縁の布施と思しき「古キ絹ノ切」を前に置いて立ち去った。それは「金乱ニテ織奉ル観音□梵字」だった。後に知蓮は、同じ繡帳を持った「泊瀬ノ勸進ノ聖、十穀」と出会う。十穀は知蓮の話聞いて驚き、初瀬の「御真鉢」は「瑪瑙石」であり、瑪瑙は女体であることから、知蓮に繡帳を奉ったのは「御真鉢」の化現だったのではないかと語ったという。

このように『竹むきが記』の成立から約百五十年を経た長谷寺繡帳切縁起の時点でも、長谷観音の台座石を瑪瑙とする説は唱えられていた。前者では長谷寺における唱導の痕跡が垣間見えたが、後者では「泊瀬ノ勸進ノ聖、十穀」がその説を開陳したということであれば、「宝石」瑪瑙説は長谷寺の勸進聖の唱導を通じ長い命脈を保ったことが想定される。

四 長谷寺における

中世後期以降の台座石伝承

では十五世紀以降、長谷寺で「宝石」が常に瑪瑙石として認識されたのかと言えば、意外にもそうは言い切れない。例えば天正九年（一五八一）の書写奥書をもつ天理大

学附属天理図書館蔵『泊瀬深秘之事』に次のような記述が見出される。

此一巻、極深秘也。穴賢々々。又云ク、宝石トハ此土ノ最下ニ閻浮檀金トテ、金ノ世界アリ。是ヨリ出生シタル水精輪ノ石アリ。彼石ノ枝三アリ。一ニハ唐土匠王山、一ニハ南方補陀落山、一ニハ今ノ泊瀬ノ宝石也。南閻浮提ノ仏法ヲツナギタル名石ト見エタリ。返々可秘也。

天正九年（辛巳）卯月二十五日書之

『泊瀬深秘之事』は長谷寺周辺の名所等の項目を列挙し、その上で名所の所在地や関連する伝承・和歌などを記した書で、右に示したのはその巻末の記述である。²⁶順に検討を加えれば、閻浮檀金は閻浮提（南瞻部洲）の閻浮樹の下にある金（『起世因本経』卷一等）、あるいは閻浮樹の林を流れる川の底の砂金を指す（『大智度論』卷三十五等）。『泊瀬深秘之事』には「此土ノ最下」にある「金ノ世界」と記しているのが、閻浮樹の下金という意味でこの語を用いているようである。この語について、仏教における宇宙論で、世界の生起・形状を説明した『起世因本経』卷一を繙けば、

此閻浮洲、有一大樹、名曰閻浮。其本縱廣七由旬、乃至枝葉覆五十由旬。而彼樹下、有閻浮檀金聚。高二十由旬。以金從於閻浮樹下出生、是故名爲閻浮檀。閻浮檀金、因此得名。

とあり、さらにこの閻浮樹について、

其大海北有大樹王、名曰閻浮樹。身周圍有七由旬、根下入地二十一由旬、高百由旬、乃至枝葉四面垂覆五十由旬。

とある。地下二十一由旬というのは、確かに地下の深いところにはちがいない。ただし金輪際とは、金輪が水輪と接するところである。金輪の厚さについて、『俱舍論』卷十一では三十二万由旬、『起世因本經』卷一では四十八万由旬であると説く。したがって底が金輪際から生じているなら、長谷観音の台座石の高さは三十二万由旬ないし四十八万由旬に相当するような単位となるが、閻浮檀金から生じているなら高さ二十一由旬となる。閻浮檀金から生じたとするのは、実はかなり小さな設定である。

また上述のとおり金輪際と閻浮檀金とは本来異なる概念だが、「金」という呼称をもつ、地中深くにあるものという意味では相通じる側面もある。実際『源平盛衰記』卷十

八には、伊豆に流される文覚が自分の埋めた金があると言つて梶取たちをだます場面において、

やをれ、舟子どもよ。この大地の底は金輪際とて、金を敷き満ちたり。などそれまでは掘らざりけるぞ。但し法師が埋みたる金は北野の天神の鳥居の事なり。五条の天神には非ず。今一度上つて掘り直せ。

という、金輪際と閻浮檀金とを取り混ぜたような用例が見受けられる。『泊瀬深秘之事』の叙述でも、「此土ノ最下」に閻浮檀金があるとは記すものの、本来の語義で言えば地の「最下」にあるのは金輪際のはずである。『縁起文』等で説かれた金輪際に対し、『泊瀬深秘之事』で閻浮檀金という異説が唱えられたのは、案外、両者の共通性をふまえてのことなのかもしれない。

次に「宝石」を「水精輪」とする点についてであるが、周知のとおり水精（水晶）は玻璃とも称し、いわゆる七宝の一つを指す。そして瑪瑙もまた七宝の一つであるわけだから、「宝石」水精説は瑪瑙を別の七宝に言い換えた伝承と言えそうである。なお水精輪の山と言えば、『平家物語』卷七「竹生島詣」が記す、

或経の中に、「閻浮提のうちに湖あり。其中に金輪際

よりおひ出たる水精輪の山あり。天女すむ所」と言へり。則此島の事也。

といった伝承がただちに想起されるが、竹生島の伝承を整理するだけでも多くの紙幅を要するため、本稿ではこれ以上の言及はひかえたい。

ここまで閻浮檀金や水精輪という異説について確認してきたが、一方の三枝説も独自の展開を遂げたようである。三枝の取り合わせが『縁起文』で中天竺マガダ国・補陀落山・初瀬だったのに対し、『泊瀬深秘之事』では「唐土医王山」・補陀落山・初瀬となっている点がそれである。これはどう位置付けられるか。

まず「唐土医王山」は、中国仏教の聖地、阿育王山を指す。森克己氏はつとに、「育王山」は禅宗訓みで「イワウサン」と訓むのであり、「育王山」を「伊王山」「医王山」等と表記するのはそのためだと指摘している。⁽²⁸⁾「医王山」が阿育王山を指す確かな用例としては神奈川・称名寺蔵「舍利礼文」(十三世紀末〜十四世紀)及び「宋人參詣医王山之時礼拝文」(十四世紀)が現存し、文中に「医王山」という地名とともに、阿育王山の仏舍利を参詣する時に唱える「阿育王八万四千釈迦如来身真舍利耶宝塔婆」の宝号

が繰り返し記されている。⁽²⁹⁾一方の「伊王山」については、延慶本『平家物語』第二本(巻三)「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」で、余命の短いことをさとした平重盛が唐土での作善を志したさい、二千両を超える金を博多の船頭妙典に託し、このうち二百両を「生身ノ御舍利ノオウシマス伊王山ノ僧徒」に与えるよう命じた記述がある。この「伊王山」という表記は覚一本や屋代本など他の諸本では「育王山」とあり、明らかに両者は同じ地を指していると判断できる。⁽³⁰⁾

「唐土医王山」が阿育王山を指すことをふまえれば、『泊瀬深秘之事』で三枝の一つにこの地が登場する意味は比較的容易に推測できる。右に引用した称名寺蔵「舍利礼文」や延慶本『平家物語』にもあるとおり、阿育王寺には釈迦の舍利塔があった。この塔は古代インドのアショーカ王(阿育王)が造立した八万四千基の舍利塔の一つであると信じられ、歴代王朝から崇敬された。中天竺マガダ国の成道座と同様に、「唐土医王山」は釈迦その人と通じる聖地である。とすれば、『泊瀬深秘之事』の叙述は、「寶石」の材質を瑪瑙から水精に言い換えたことと同様に、「唐土医王山」は中天竺にあった釈迦の成道座を言い換えた伝承だということになるだろう。なお『泊瀬深秘之事』では「南

閻浮提ノ仏法ヲツナギタル名石」とあり、仏法東漸を示唆する意味付けが与えられている。三枝の一つが西の天竺から東の「唐土」に移されているのは、このような意味付けと響き合わせてのことかもしれない。

以上『泊瀬深秘之事』の「宝石」伝承に検討を加えた。前節で述べたとおり、「宝石」瑪瑙説は長谷寺の内外で喧伝されたが、『泊瀬深秘之事』では「宝石」水精説を説き、さらに「宝石」が閻浮檀金から生じているとしたり、三枝の一つに「唐土医王山」をあてたりするという独自の説を記していた。『泊瀬深秘之事』の「宝石」伝承は、『縁起文』を基盤としつつも、それに必ずしもとられない変容を志向したものと評価できるであろう。

実は『泊瀬深秘之事』とはほぼ同時期に書写された、『縁起文』と重ならない叙述をもつ文献がもう一つある。天正十五年（一五八七）書写『長谷寺驗記』下巻卷末の注記である。

起世経云、

大和国長谷寺觀世音之宝石高コト一億五十二万四千由旬。大地厚事八万四千由旬。水厚事六十万由旬。金輪際八万四千由旬。是ハ大海也。三十六町一里数二百億

八万六千二百也。三世利益之觀世音院之御宝石是也。

まず「宝石」の高さを「一億五十二万四千由旬」と明記する点がいかに目をひく。億には一万の十倍・百倍・千倍・万倍等、四種の数え方があり、「一億五十二万」と記す右の本文の場合、一億は百万を指すかと思われる。ただ「宝石」の高さを百五十二万四千由旬としても、例えば「大地」と「水」を足した高さ（六十八万四千由旬）より大きい数字となり、いかに巨大な石として長谷観音の台座石が認識されていたかを物語る。『泊瀬深秘之事』の記す閻浮檀金から生じたという説では「宝石」はかなり小さくなってしまうのだが、これと対照的に天正本『驗記』ではきわめて大きくなっているのである。

なお右の本文は冒頭に「起世経云」とあり、加えて大地の厚さが八万四千由旬、水の厚さが六十万由旬だと記す。厳密に対応するわけではないが『起世因本経』（隋・達磨笈多訳）巻一に、

諸比丘。此大地厚四十八万由旬、辺広無量。諸比丘。

此之大地住於水上、水住風上、風依虚空。諸比丘。此大地下所有水聚、彼水聚厚六十万由旬^③。

という説は見出せる（隋・闍那崛多訳『起世経』にも同じ

説あり)。ただ天正本『験記』を読むと、一見「起世経」で長谷寺の宝石について記されているように読めるが、『起世因品経』が漢訳されたのは隋代、つまり長谷寺創建前であつて、当然ながらこの中に長谷寺の宝石に関する叙述は確認できない。とすれば天正本『験記』巻末の叙述は、『起世因品経』等が記していた「大地」や「水」の叙述をやや不完全ながらふまえつつ、その厚さを凌駕するような巨石として長谷観音の台座石を説こうとした説ということになるだろう。

以上『泊瀬深秘之事』や天正本『験記』の叙述を検討してきたが、長谷寺で『縁起文』の叙述がなおざりにされたわけではない。例えば正徳三年（一七一三）序『豊山伝通記』では『縁起文』の本文をそのまま載せ、宝暦十年（一七六〇）序『豊山玉石集』では『縁起文』を仮名に改めた『長谷寺縁起』上中下巻の本文を引用する。近世の地誌類も『縁起文』の所説をふまえて書かれるのが通例であり、例えば寛政三年（一七九一）刊『大和名所図会』では『縁起文』に基づいて三枝説を紹介し「已上本縁起文大意」と注記する。長谷観音の台座石は、とりわけ中世末期にはさまざまな異説が生じたようだが、近世には『縁起文』の所

説が長く参照されたようである。

五 今後の研究の指針

本稿を起筆したさいは、中世における他の金輪際伝承を挙げ、比較検討する予定だったが、すでに多くの紙幅を費やしており、これ以上、検討を進めることができない。本稿の冒頭で、石に関わる信仰や伝承は多彩であると述べたが、長谷観音の台座石もまさにそういう事例であることを改めて認識している。若干ふれた金輪際と閻浮檀金の問題ひとつ取り上げても、関連事例はまだまだ数多くあるであろう。指摘が至らず不備な点については、諸賢の御示教、御批正をお願いしたい。

また本稿では、長谷観音の台座石伝承の淵源や三枝説のもつ問題点についてまったく言及できなかった。民俗学の分野における研究の蓄積が、初瀬の石の問題を理解する上でどう援用できるかという点も手つかずのままである。論じ残した問題は多い。今回の基礎的考察をふまえ、機会を改めて検討したいと考えている。

注

- (1) 長谷寺の「宝石」伝承を中心に論じた唯一の先行研究は池上洵一氏「附章(1) 長谷寺研究のためのキーワード 宝石」(『池上洵一著作集 第四卷 説話とその周辺』和泉書院、平20、初出平18)である。池上氏は「長谷寺験記」等における石の伝承と、それに関わる論点を明確に整理しており、益するところがきわめて大きい。ただこの論考は当初『国文論叢』第36号(平18・7)所収「中世長谷寺キード小辞典」の一篇として、すなわち辞書の項目解説という紙面の制約の中で書かれたものであり、氏の提起した論点に導かれつつ、事例を収集し、理解をさらに深める必要がある。この意味において本稿は、池上論考の発展的継承を企図したものである。
- 一方、藤巻和宏氏は「『長谷寺縁起文』観音台座顕現譚成立の背景―空海神泉苑請雨譚・如意宝珠龍王伝授説との関わりから―」(『国文学研究』133、平13・3)等、一連の論考で長谷観音の台座石を論じるが、氏の関心は台座顕現譚と龍神信仰や室生寺の血脈との関わり、あるいは縁起説の影響関係の解明にあるようであり、石自体の問題は論じられていない。
- (2) 旧来の通説では『験記』は十三世紀前半成立とされてきたが、通説が成り立たないことは拙稿「長谷寺験記」の成立年代」(『日本文学』平22・2)で詳論した。
- (3) 阿部泰郎氏「長谷寺の縁起と霊験記」(『仏教民俗学大系』
- 1 仏教民俗学の諸問題」名著出版、平5)
- (4) 『縁起文』の成立時期は十二世紀初頭とするものから十三世紀後半とするものまで大きく見解が分かれており、定説を見ない。先行研究については、上島享氏「中世神話の創造―長谷寺縁起と南都世界―」(『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版会、平22、初出平18)に整理がある。
- (5) 長谷寺の説話伝承における童子の位相については拙稿「長谷寺の善悪諸神―特に童子を中心として―」(『説話論集』16「説話の中の善悪諸神」、清文堂出版、平19)参照。
- (6) 長谷観音の御衣木については、拙稿「長谷観音の御衣木と説話」(『南都仏教』88、平18・12)参照。
- (7) 『縁起文』が記すような所説は、修験の霊山の描写にしばしば散見する。例えば『諸山縁起』に記す、葛城修験の宿の次第記に「毘沙門堂(竜穴・十六丈石塔あり)。口伝あり」とある(『日本思想大系』『寺社縁起』一二七頁。『諸山縁起』の成立は鎌倉初期か)。またやや時代がくだるが、長禄二年(一四五八)書写『戸隠山顕光寺流記』には「峯中之事、自然涌出之両界曼荼羅・高妻明神水精多宝塔(高八尺)円鏡(径八尺)如是等秘事多之、輒不能載、委細有別紙矣」(『山岳宗教史研究叢書』17 修験道史料集I 東日本篇」名著出版、昭58、四五三頁)とある。
- (8) 『豊山玉石集』火巻「十六丈水精宝塔」の項によれば、享保年間、紀州の「十四五歳なる小童」が謎の「山伏」と

き者二人」に連れ出されて伊勢に参宮し、その帰途、初瀬で「十地の菩薩等の学問し玉ふ処」や「結構なる宮殿」等の聖跡を巡拝したことがあった。その話を聞いた温春法印は、行基が金剛童子の手引きで山内の聖跡を拝した故事を引き、「実に凡人の拝む処にあらず。いかなる善因ありてか汝ハ是を拝したるぞ」と語ったという。本文は続豊山全書第十八巻五九―六一頁参照。

(9) 事実この場面は、出光美術館本『長谷寺縁起絵巻』(紙本着色、十四世紀)や長谷寺本『長谷寺縁起』(目録番号六八九番、紙本着色、室町時代)等で絵画化されている(図像は『色と墨のいざない 出光美術館コレクション展』(滋賀県立近代美術館、平22)四一―四三頁、『豊山長谷寺拾遺 第一輯 絵画』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、平6)二〇六―二〇七頁参照)。「長谷寺縁起」絵巻の詞書及び画中詞については、宮次男氏「研究資料 公刊 長谷寺縁起詞書」(『美術研究』278、昭46・11、底本は林家旧蔵、出光美術館本)、平塚泰三氏「鎌倉・長谷寺所蔵『長谷寺縁起絵巻』弘治三年奥書について」(『日本美術の空間と形式』河合正朝教授還暦記念論文集刊行会、平15)等が翻刻、紹介する。『長谷寺縁起文』を含め、縁起と図像との関わりについては、阿部泰郎氏「霊地の図像学」(『国文学』平8・3)が総括的に論じる。また阿部美香氏は『縁起文』の記す行基巡礼を「修験の行者が修行を通して感得する神仏の聖なるすがたを次々と具体的に見あらわ

していく」ものにとらえた上で『長谷寺縁起』絵巻に言及するとともに、「浄土巡りを核とする修験縁起の絵画化」の問題を論じている。「浄土巡歴譚とその絵画化―メトロポリタン美術館本『北野天神縁起』をめぐって―」(『説話文学研究』45、平22・7)参照。

(10) 内田濤子氏「内閣文庫本『長谷寺蜜奏記』―翻刻と解説―」(『国文論叢』32、平14・8)参照。

(11) 注(1) 池上氏論考参照。山内の石を聖跡として認識したことは、天正九年(一五八一)の書写奥書をもつ天理大学附属天理図書館蔵『泊瀬深秘之事』にも認められる。

三玉ノ石(トハ伊勢大神宮・八幡・春日、三所ノ地ヲト給ふ所也。彼所二三石有。其名カキヤウ、クツカタ・シヤウセキト云也。彼三ノ石難有。神石ナレバ宝石トハ申也。是ハツセノ神所第一ノ秘所也。可秘也)

(12) 『濫觴抄』上巻でも同様に「雷公降臨」につき記すが、金輪際や三枝に関する叙述は見えない。

(13) このように鎌倉前中期に成立した文献を見ても『縁起文』が影響を与えた形跡は確かめられない。この問題は『縁起文』という書物の成立時期をいつと考えるかという問題と関わるであろう。注(4) 前掲論文で上島享氏は本書の成立時期を勧進聖行仁が活躍したとされる十二世紀初頭とみているが、そこまで成立年代がさかのぼるのであれば、秘すべき書物として扱われた形跡のない『縁起文』がなぜ『建久御巡礼記』等の文献に影響を与えていないのか

疑問である。『縁起文』成立の外部徴証がようやく確認できるのは、嘉元四年（一三〇六）十月十八日定証起請文（鎌倉遺文二二七四七号）や正和三年（一三二四）橘寺の法空が著した『聖徳太子平氏伝雜勘文』上「泊瀬川事」同じく法空が撰した『上宮太子拾遺記』第一「泊瀬川得名事」においてである。上島氏のような理解に対しては慎重でありたい。

- (14) 「南都系長谷寺縁起説の展開―建久御巡礼記」、『諸寺建立次第』、護国寺本『諸寺縁起集』の検討から―（『巡礼記研究』1、平16・12）、「南都系縁起説と長谷寺縁起の言説世界―研究史の整理と新たな視点の導入に向けて―」（『むろまち』9、平17・3）等参照。例えば藤巻氏は後者の論文で『建久御巡礼記』や『諸寺建立次第』、護国寺本『諸寺縁起集』を南都系縁起説と命名するとともに、「こうした言説を経ることにより従来の縁起説が整理・改変され、後に『長谷寺縁起文』に材料を豊富に提供することとなる。（略）南都の縁起説再編を経由することなしに『縁起文』は成立しえないのであり、この一点を挙げるだけで、『縁起文』成立十二世紀中期説は再考されてしかるべきである」と指摘する。氏はこのことを論じるにあたり、台座石出現の場面も取り上げている。

- (15) 池上洵一氏「平流山文化圏―飛来峰伝説―」（『修験の道―「三国伝記」の世界―』第四章、『池上洵一著作集 第三卷 今昔・三国伝記の世界』和泉書院、平20、初出平

11）、小林直樹氏「『三国伝記』と『長谷寺験記―観音と神々の提携―』（『中世説話集とその基盤』和泉書院、平16、初出平13）参照。

- (16) 「三国伝記 上」（三弥井書店、中世の文学、昭62）一三四頁注一七。

- (17) 尾道・浄土寺と長谷信仰との関わりについては、瀬谷貴之氏「長谷寺観音信仰と中世律宗―金沢・海岸尼寺、厚木・飯山寺、鎌倉・長谷寺、尾道・浄土寺、奈良・西大寺をめぐる―」（『鎌倉』100、平17・10）参照。

- (18) 『竹むきが記』で「済度利生の空しからざる事、古に旧り今に流れて初瀬川の音絶えず、大慈大悲の深き色は八入の岡の木々に染めても、猶喩とするに及ばざるにや」とある箇所は、『験記』序文の「大慈大悲ノ蒙^ヌ色ハ八入岡^{ヤウカ}時雨ニ染、済生済度ノ松ノミドリハ泊瀬ノ山ノ嵐ニ深シ」という本文と類似する。ただ『竹むきが記』の作者が後に長谷観音の像高を「二丈六尺」と記した箇所は、『験記』では二丈六尺と見える。これらの点をふまえ、松本寧至氏は、作者が『験記』を見た可能性にも言及しつつ、「このような誤りをおかすところを見ると、『靈験記』を見たというより、聞書とみる方が穏当であるかも知れない」と述べている。また両書の類似箇所については「寺僧が『靈験記』にそった説明をしたのを、かなり忠実に記録したのであろう」との見解を示す（『竹むきが記』中の石山・長谷の記事―日記文学と縁起―『豊山学報』16、昭46・3）。

従うべき見解であろう。本稿で論じているとおり、『竹むきが記』には『縁起文』や『験記』に見えない「宝石」瑪瑙説が説かれており、その記述のすべてを書承と考えることはできない。作者自身が長谷寺に赴いていることをあわせて考慮するならば、『竹むきが記』の叙述には長谷寺僧の唱導の痕跡をみるべきである。

(19) この点については近時解明が進みつつある。池上洵一氏「長谷寺研究のためのキーワード」及び「観音がくれた風車」『長谷寺験記』下巻第29話―（いづれも『池上洵一著作集 第四巻 説話とその周辺』（和泉書院、平20）所収、注（9）阿部美香氏論考等参照。

(20) 本稿では初瀬の「宝石」瑪瑙説の成立に修験の影響を想定してみたが、そもそも瑪瑙は仏教經典で聖地や建造物を描写するときに頻出する語句でもある。特に顕著なのは隋・闍那崛多訳『起世經』卷一・六で、各巻で二十例以上の用例が確認できる。一例のみ示せば、須弥山について「諸比丘。須弥山王、上分有峯、四面挺出、曲臨海上、各高七百由旬、殊妙可愛、七宝合成、所謂金・銀・琉璃・頗梨・真珠・車璫・瑪瑙之所莊校」とあり（大正新脩大藏經第一卷三二〇頁c）、瑪瑙をはじめとする七宝で莊嚴されていると記す。曹魏・天竺三藏僧伽跋闍『無量壽經』卷上に説く仏国土（淨土）の描写もこれと同様で、例えば「仏言、成仏已來凡歷三十劫」。其仏国土自然七宝、金・銀・琉璃・珊瑚・琥珀・車璫・瑪瑙、合成爲地」（大正新脩大藏經第

十二卷二七〇頁a）のような記述が十例以上見受けられる。七宝で莊嚴された聖遺物が地中に埋まっている意味で言えば、釈迦の説法にさいし高き五百由旬の七宝塔が地中から涌出したという『法華經』見宝塔品の經説も著名である。長谷寺には『法華經』見宝塔品に基づいて造られた国宝・銅板法華説相図も伝来している。

なお經典に説く淨土の具現化として本朝の靈地をとらえる発想にたつならば、經説が靈地の描写に影響を与えるのは当然である。例えば『諸山縁起』の記す葛城山系の九十五箇所の行所（このうち二十八箇所は『法華經』二十八品に充當）を分析した宮家準氏は、中世の葛城山は全体として『法華經』の靈山淨土の性格を強く持っていること、弥勒・阿弥陀の他界や山岳曼荼羅觀も見られないわけではないことなどを指摘している（『他界としての葛城山』（『修験道思想の研究（増補決定版）』春秋社、平11）。『諸山縁起』には、大峰の神仙嶽に三重の石屋があり、その丑寅の角に「縁起の箱」がある、その箱は「七宝を以て造り、巖を穿ち」納め置いてあるという説、あるいは一代峯（笠置山）において天人が告げた「この下に池あり。縦広四十里にして、池の内に七宝満ち、池上に石像の慈尊あり。僅かに四百余歳なり」という説など、修験の聖地の描写に七宝が関わる例はいくつか見出せる（日本思想大系『寺社縁起』一三二・一三七頁）。初瀬の「宝石」瑪瑙説をどう把握するかは、經説を含めたこれらの多様な事例を視野に入

れつつ、慎重に検討する必要がある。

- (21) 引用は高野修氏『時宗中世文書史料集』（白金叢書刊行会、平3）四七頁による。

- (22) 『泊瀬深秘之事』の詳しい内容については、本文を翻刻した後掲の拙稿を参照されたい。

- (23) 引用は大正新脩大藏經第一卷三六六頁cによる。

- (24) 引用は大正新脩大藏經第一卷三六七頁bによる。

- (25) 本文は大正新脩大藏經第二十九卷五七頁a参照。

- (26) 本文は大正新脩大藏經第一卷三六五頁c参照。

- (27) 引用は水原一氏『新定源平盛衰記 二』（新人物往来社、昭63）三八一頁による。

- (28) 「日宋交通と阿育王山」（『日宋文化交流の諸問題』刀江書院、昭25）

- (29) 「舍利礼文」等の写真及び解説は『聖地寧波』（奈良国立博物館、平21、作品番号四五〇四六番）参照。

- (30) 本文及び諸本の異同等については、延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 第二本（巻三）』（汲古書院、平19）三八六・三九五～三九六頁参照。

- (31) 引用は大正新脩大藏經第一卷三六五頁cによる。

- (32) 本文は『豊山伝通記』が豊山全書第十八巻、『豊山玉石集』が統豊山全書第十八巻をそれぞれ参照。

- (33) 引用は『大和名所図会』（版本地誌大系3、臨川書店、平7）三八三頁による。

※注に記したもののほか、引用本文は以下のテキストによる。

『長谷寺縁起』（鎌倉写本）は新典社善本叢書、『長谷寺縁起文』は拙稿「長谷寺本・伝遊行三十七代託資上人筆『長谷寺縁起文』―翻刻と解説―」（『国文論叢』36、平18・7）、『長谷寺密奏記』は内田濤子氏「内閣文庫本『長谷寺密奏記』―翻刻と解説―」（『国文論叢』32、平14・8）、『泊瀬深秘之事』は拙稿「資料紹介」天理大学附属天理図書館蔵『泊瀬深秘之事』（『大阪大谷国文』41、平23・3）、『建久御巡礼記』・護国寺本『諸寺縁起集』・『諸寺建立次第』は校刊美術史料、『帝王編年記』・『元亨釈書』は新訂増補国史大系、『続教訓抄』は日本古典全集、『三國伝記』は中世の文学、『竹むきが記』・『平家物語』は新日本古典文学大系、『諸山縁起』・『明宿集』は日本思想大系、『濫觴抄』・『神明鏡』は続群書類従、『阿婆縛抄』は大正新脩大藏經、『一山山階寺寛繼法橋』は西田長男氏「室生竜穴神社および室生寺の草創」（『日本神道史研究 第四巻 中世編上』講談社、昭53）。諸文献の引用にあたっては原則として通行の字体に従い、私に句読点や清濁を施した。へんは割注・傍注等、（ ）は筆者による注記、□は欠字による空白を指す。

※本稿は平成二十四年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「中世南都観音伝承の形成と展開に関する総合的研究」（課題番号22520212）による研究成果の一部である。

（本学日本文学科学科准教授）